総の国の頼朝伝説

上総の国いちはらの歴史を知る会

まえがき

私たちの住みます千葉県、中世には総の国と呼ばれ、上総・下総・安房の３国がありました。その中で、平安時代末期における総の国は、後の国勢に大変重要な地域であったと思います。

それは、源頼朝の存在であり、中世日本の立役者であり鎌倉幕府を開いた武将で、貴族社会から武家社会中心の政治を行い、自らは征夷大将軍という地位につき、政治的能力や人材掌握力に優れ、日本史上稀にみる組織運営の天才と評される。後世においてもその影響力が及び、徳川家康も頼朝の手腕をお手本にしたと言われる。

そこで、千葉県の各地に語れる源頼朝の足取りや伝説などを調査してみました。伝説の中には眉唾的なものもある様ですが、先人たちが言い伝えとして大切に守って来たものなので、伝承通りに記したいと思います。

源頼朝の生涯

頼朝は、久安３年（１１４７年）に尾張国熱田に生まれる。父は源義朝、母方は藤原秀範の娘の由良御前の三男として生まれました。

頼朝が１３歳の頃、平治元年（１１５９年）１２月９日に起きた平治の乱で義朝は富士吾信頼らと共に後白河上皇と二条天皇を名裏に捕える。頼朝は１４日に右兵衛権佐に任ぜられた。

２６日に上皇と天皇は内裏から逃げられる。２７日に官軍となった平清盛らが内裏に攻め寄せ、賊軍となった義朝らは敗れ京を逃れ、東国を目指したが、永暦元年（１１６０年）２月９日に頼朝は近江国で捕らえられ京の六波羅に送られた。そこでは死刑当然と思われた頼朝は、清盛の継母の池禅尼の嘆願により死一等を減ぜられ、伊豆国へ流刑とされた。

平治の乱では、義朝は尾張国野間で長田忠致により謀殺され、長兄の義平は都で処刑され、次兄の朝長は負傷により美濃国青墓で落命している。

伊豆国での流人生活について

伊豆国での流人生活での資料は少なく、配流地として蛭ケ小島といわれているが、ここは北条氏の支配領域であることから、ここに共住していたかは不明です。

この間に、伊豆の豪族の北条時政の長女の政子と婚姻関係を結び長女大姫をもうけている。婚姻の時期は大姫の生年が治承２年（１１７９年）とされることから、治承元年頃と思われる。

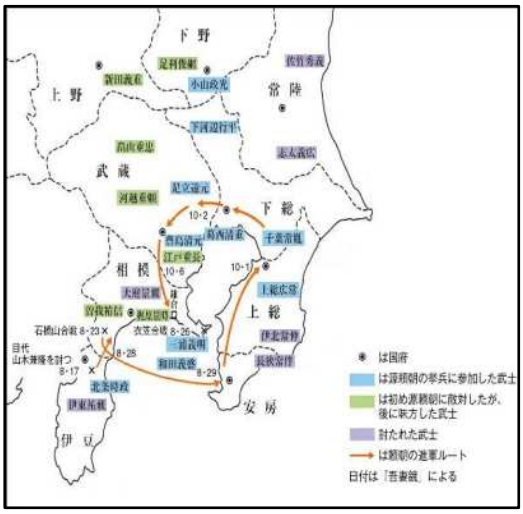
挙兵

治承４年（１１８０年）後白河法皇の皇子である以仁王が平家追討を命ずる令旨を諸国の源氏に発し源氏追討を企て、頼朝にも危機が迫っていることを察し挙兵の意志を固めた。そこで、坂東の各豪族に挙兵の協力を呼びかけたが、挙兵に否定的な源氏の家人もいたが、知行国主変更に伴って圧迫を受けていた武士や、平家に近い豪族との対立関係にある武士たちの協力が得られた。

石橋山の戦いで敗れ、僅かな従者と隠れ家で打ち合わせる頼朝軍

最初の標的は伊豆国目代の山木兼隆と定め、８月１７日に北条時政らに韮山の兼隆の目代屋敷を襲撃して兼隆を打ち取った。伊豆を制圧した頼朝軍３百騎は、相模国土肥郷へ向かい、三浦一族と合流し平家方の大庭景親、伊藤祐親らと石橋山に向かったが、三浦一族は大雨のために増水した酒匂川を渡れず頼朝軍と合流できなかった。その為頼朝軍は敗北し、土肥実平ら僅か従者と共に山中に逃れ、数日後山中逃亡後に真鶴岬から船で安房国へ脱出した。

坂東平定



治承４年（１１８０年）８月２９日に頼朝は安房国の平北郡猟島に上陸した。（源平盛衰記では安房郡洲崎と記載）平北郡には頼朝を支える相模三浦氏の勢力下であったことから、猟島に上陸したものと思われる。
その後、安房国内で長狭常伴を討ったことが頼朝の安房国制圧を達成したこととなり、長狭氏を上回る軍事力と経済力を持っている安西氏が頼朝に参向したことから、頼朝の再起が事実上成立したと考えられる。
その後房総に勢力を持つ上総常広と千葉胤常に加勢を要請した。頼朝は９月１３日に安房国を出て千葉一族と市原国府で合流し、その後上総広常軍と合流、両氏を勢力に加えた頼朝は、１０月２日に大井・隅田の両河を渡った。武蔵国に入ると足立遠元・葛西清重を加えた。葛西清重の説得により同じ秩父一族の畠山重忠・河越重頼・江戸重長らも頼朝に従うこととなり、１０月６日にかつて父や兄義平の住んでいた鎌倉に入った。
その後の活躍はここでは省略をします。

吾妻鏡における源頼朝の安房国での行程

８月２７日	三浦義澄らが三浦から安房国へ出航。
	北条時政・岡崎義実らが土肥郷岩浦から安房国へ出航。
８月２８日	頼朝らが土肥実平と共に真鶴から安房国に向けて出港。
８月２９日	頼朝らが安房国平北郡猟島（鋸南町竜島）に到着。
９月　１日	頼朝が、安西景益に御書を送る。
９月　３日	頼朝が小山朝政・下河辺行平・豊島清元・葛西清重らに御書を送る。
	頼朝が上総広常の屋敷へ向かう為出発し、途中民家に宿泊。長狭常伴らに襲撃される。
	その後、三浦義澄が長狭常伴を討つ。
９月　４日	頼朝が安西景益の屋敷に向かう。
	和田義盛が上総広常の屋敷へ、安達盛長が千葉介常胤の屋敷へ向かう。
９月　５日	頼朝が洲崎明神（洲崎神社）に参詣。
９月　６日	和田義盛が上総広常の屋敷から帰参。
９月　８日	北条時政が甲斐国に出発。
９月　９日	安達盛長が千葉常胤の屋敷から帰参。
９月１１日	頼朝が丸御厨を巡検。

９月１２日　　頼朝が洲崎宮（洲崎神社）へ寄進状を送る。
９月１３日　　兵が３００騎に達し、頼朝らが安房から上総に向けて出発する。
９月１５日　　木更津の八幡神社に集結し、袖ケ浦の飽富神社で戦勝祈願を行い、禰宜の案内で宮司が以前より親交のあった市原の立野長左衛門宅に向かう。
９月１７日　　市原郡君塚神社（現白幡神社）にて参拝し千葉介常胤軍と合流をする。
吾妻鏡では、市川の下総国府で千葉介常胤と合流とあるが、位置的には疑問。
９月１８日　　下総国千葉郡幕張にて宿泊。
９月１９日　　下総国府にて上総介広常の軍と合流。広常の軍は公称２万騎と言われている。
９月２８日　　武蔵国を前に、敵対す津江戸重長に使者を出す。
10 月　２日　　大井川・江戸川を渡り武蔵国に入る。（亀有から墨田に向かう。隅田川左岸の微高地を通ったという。）
10 月　３日　　頼朝の命で、以北、庄司常仲を攻撃した（頼朝を襲おうした長狭常伴の甥）
10 月　６日　　念願の鎌倉に入る。

房総各地に語られる伝承や史跡
南房総市（安房国）の残る伝承

１・竜島での伝承（「鋸南町史」昭和４４年刊より）

頼朝の乗った船が着船した所が竜島（猟島または飯島朋いう）で、現在の竜島で西端の浜を八王子と言い、八王子ノ宮が祀られており頼朝扁舟に竿さして、当国に至り上陸の第一歩を記した所で、時に治承４年８月２９日の事です。
海上僅かの所に飯島という小島がある。今は海中に没し、潮干には頂を出す。従臣土肥実平（或いは三浦義澄）炊飯の所と。後ろの山を行山、又は旗立山という。先着の北条殿以下笹りんどうの旗を立てて目印とし、佐殿（頼朝）を待ちし所。
中腹に一堂があり、薬師及び観音を祀る。
頼朝ここに武運を祈りゆえに旗城山観音堂という（または大日堂なりしと）頼朝明神の森に宿る今の明神社の前身である。主人某、房総の将兵左右より多く来り加わらんことを祈願し、よって姓を左右加と賜った。又いう、頼朝、主の歓待を謝し、我、天下を取らば、安房一国を与えようと、某、聞き間違えて「栗一石は裏の畑でも取れます、それより姓を賜われ」と、公、笑うて「さうか、馬鹿なやつ」と独言したまう。某喜んで「左右加」「馬賀」を姓となしたという説。

公一日御気晴らしのために御遊漁、海岸のさざえに御足を痛め給い「飯島にさざえあるとも角なかれ」と。以来この海のさざえは今も角がない。おそらく波静かな所でおのずから角も退化したものか。

この時漁夫、太郎右衛門、エイを得て献上した。ゆえにその島をエイ島という。エイ島あるいは飯島か。太郎右衛門は賞詞と共に姓を賜り鰭崎（ひれさき）という。

浪人福原民部は珍しい貝を得て献じたので、姓、生貝を賜い、御加勢を免じられた。

竜島の民家は当時１８戸ばかり、それぞれに姓を賜り例えば、家居、小松茂るがゆえに「松山」といい、菊間・柴本・中山・久保田・鰭崎・生貝と共にこれゆえ竜島の七姓という。

頼朝公渡船の水主を艪井・間・渡と言い、今勝山に伝わる。

公飲用の井戸、弥惣兵衛門に伝わる。これを玉の井という。字玉の井の起源であろう。

ちなみに松山弥惣兵衛は、元禄１１年房ケ谷の光顕寺を造った棟梁であった。

行山南麓の小川家には拝領の槍を伝えたが数代前、ゆえあって刃物に打ち換えたという。行山西北麓に巨岩があり、東面にして小洞二つをうがつ、これを姥塚という。古来竜島、大六両村海境の一起点とされたが、頼朝のうば某、公の武運を毎日、堂に祈る。その死後これを祀って姥塚としたという。９月３日出発の際御馬に召し給うところ、これを駒立小屋という。左右加氏の私邸であろう。

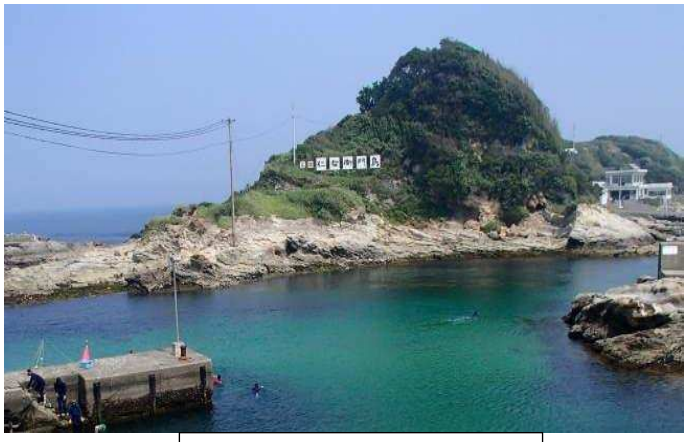
頼朝は是より、上総に至らんとし、大六、池月（現在の江月）大崩の峯伝いに嶺岡を経て貝渚に至る。長狭の六郎らの夜襲に遭い、仁右衛門島にて匿われた。

仁右衛門島の伝承

鴨川市太海の海岸から５０ｍ程離れた海に浮かぶ島が仁右衛門島です。周囲は４ｋｍほどで砂岩で出来ている。この島は、昔から代々平野仁右衛門が所有しており、代が変わっても「仁右衛門」という名を継いでいる。現在の仁右衛門は推定で３８代目となる。

伝承によれば、源頼朝が石橋山の戦いに敗れ安房国に逃れてきた際に、平家に通じる平北郡在住の長狭六郎常伴が頼朝の宿を襲撃した際に、当時の島の当主仁右衛門が頼朝を匿ったという。

頼朝はそのお礼としてこの島を与えてという伝説がある。



頼朝を匿った仁右衛門島

頼朝が隠れた隠れ穴

上総介広常と頼朝伝説

頼朝が安房国に上陸し、まず考えたのは房総半島で最大勢力の上総介広常の勢力を得て、身の安全を図ることでした。そこで上総介広常の屋敷に向かうことでしたが、貝渚の宿泊中に長狭常伴の勢力に襲われた。仁右衛門島で匿われて助かったという。八雲神社には、頼朝が立ち寄ったという伝承があり、松崎には、頼朝が上総広常の参向を待った（待崎）という伝承もある。

４日安西が言を入れて勝山の安西景益の屋敷に帰り、１２日まで、諸国に使いを派して形勢観望のかたわら当国の洲崎明神を参詣して武運長久を祈願し、白浜の瀧口大明神（下立松原神社）も参詣している。その際に、「宗近」の大刀」を奉納し、戦勝祈願をしている。またその際に、鞍馬を提供された人がおり、その人が住んでいた場所が安馬谷と呼ばれるようになった。

ところで、この神社には鳥居がありません。頼朝が参詣する際、敗戦の身を憚って鳥居を避けて入ろうとしたところ、地元の住民が鳥居を取り除いて招き入れたとされ、以来鳥居は作られず今日に至っている。また、頼朝の大般若経を埋めたとされる経塚もある。

頼朝が征夷大将軍になって鎌倉幕府を開いた後、自らが書き写した大般若経６００巻を奉納した。それが５００年経ち痛んできたので石函に入れて埋め、経塚が建てられた。

和田町黒岩の熊野神社には旗掛け松が源氏再興を祈念して、松の木の枝に白旗を挙げたという伝承がある。

海岸伝いに野島崎に着いた。

野島では、祀られている弁天堂のかたわらの岩に「野島山」の三文字を矢じりで刻み、武運再興の願掛けをしている。その時、突然の時雨に合い、近くの岩屋に身を寄せて雨を凌いだという

この岩屋は「頼朝の隠れ岩屋」と称して今も残っている。

この岩屋には、いつの頃から深海にすむという創造の大蛸が海神として祀られていて、開運（貝運）の神として祀られています。

頼朝は、しばらく美しい景色を眺めながら、従者の労をねぎらい、酒宴を開いたという。その場所には、「盃の池」や「銚子の池」などの地名が残り、頼朝が休憩のために幹に腰かけた「頼朝の腰掛けの松」があったという伝承もある。

丸御厨（丸本郷）

頼朝は丸御厨（まるのみくりや）に立ち寄りました。丸御厨は、頼朝の父である源義朝がその生前に頼朝の出世を願って伊勢神宮に寄進した荘園です。頼朝は父、義朝もまたその為義から丸御厨を受け継いでいたことを知り、祖父や父の心を思い、涙を流したという。そして自分の祈願である源氏再興が成就した暁には「安房国に新たに御厨を立てて伊勢神宮に寄進する」ことを誓った。

丸御厨は、現在の南房総市丸本郷の安楽寺周辺であるとされている。

頼朝の隠れ岩屋の大蛸

鳥居の代わりに大杉に締縄

大般若経納められた經塚

頼朝が訪れた洲崎神社

９月４日に上総広常と千葉常胤に参上するように使者をおくり、翌５日に洲崎神社を参拝して使者が無事帰還した場合には神田を寄進するという願文を奉納している。９月１２日に奉納した。

１１８１年（治承５年）２月１０日には、洲崎神社領の年貢以外は夫役や雑税を免除。

１１８２年（寿永元年）８月１１日には、北条政子の安産祈願のために安西景益を奉幣使として派遣している。（翌年誕生したのが嫡男の源頼家）

洲崎神社の本殿建物

養老寺の一本すすき

源頼朝が洲崎神社へ参詣した際、昼食時に箸の代用にしたススキを地に挿し、「我が武運が強ければここに根付けよ」というと、後に数茎に根付いたという伝承があり、土地の人は「一本すすき」と呼んでいる。

養老寺の本堂

養老寺境内の一本すすき

立て矢の井戸伝説

上陸した頼朝が飲み水がないため、岩間に矢尻を突き立てたところ清水が湧いたという伝説。　所在の場所は、館山市洲崎ですが「義経記」に記されているもので、頼朝一行は竜島ではなく　洲崎の臥島と記されている。

笠掛の松　（洲崎地区）

洲崎地区には「漂（みよ）」と笠掛（かさげ）という集落があって、これは頼朝が松に笠を掛けて　「あれ見様笠掛けて」と言ったことから、頼朝が見た集落を「漂」、立っていた集落を「笠掛」呼ぶ　ようになったという。

金明様　（南房総市白浜）

大高尾字揚橋に石宮一基が祀られている。伝承によると、源頼朝の家臣が石橋山の合戦で深手を負い、頼朝に仕えることが出来ないと自刃し、頼朝は、伊豆国を望める小山に埋葬して金明社と名付けたという。白浜方面の漁師は、金明様に願をかけると海難を免れ、大漁になると信じられた為、かつては参拝者が多く茶店が建つほどであったという。

磴森（するすもり）の地名の由来

この磴森の地名の由来は、この地が頼朝伝説に出て来る名馬「スルスミ」を産出した処と言われている。

館山の大井戸伝説

この大井戸には面白い伝説があります。その昔、源頼朝が港から上って来て、六兵衛さん宅に立ち寄り一服させてくれと言ったところ、貧乏だからもてなしできないと断ったそうですが、そう言いつつも、心優しい六兵衛さんは鍋で米を焼いて振舞ったそうです。頼朝はそこでお礼に「安房一国をやる」と行ったと言ったところ、六兵衛さんは勘違いをして「栗一石（あわいっこく）じゃ、貰ってもしょうがない、それなら名前が欲しい」と言ったそうです。そこで頼朝は、焼き米を振舞ってもらった場所が六兵衛さん宅のちょうど中の間だったので、「中ノ間」と名付けてくれたらしくそれから六兵衛家族は「中ノ間」の姓を名乗ったという。

更に、頼朝から「何か不自由しているか」と言われた六兵衛さんが「水に困っている」と答えると頼朝は矢を持ってゴロゴロと地面を突いたところ、そこから水が湧きだしてきたという伝説がある

その湧き水の場所がこの「大井戸」であり、かつで水道として使われたという石碑があるという。

頼朝道の由来

南房総市富山町には「頼朝道」と名付けられた道路があります。

頼朝の名を冠した道は、千葉県ではここだけと言われています。

R１２７号線から市部の交差点に入り、踏切を越えた小道です。

その他に、頼朝は褒めた大蘇鉄（現在は樹齢１０００年を超える）や、頼朝橋や戦勝を祈願した岩井神社、頼朝一行がこの坂を通ってきた「おっ越し坂」などがある。

また、満能院の庭に生えてしていた二股の竹で旗竿としたという伝承もある。それによると、頼朝が熊野神社に辛勝祈願に向かう途中、神社の近くにある満能院住職より庭に自生している節のそろつた二股の竹を頼朝に献上した。頼朝は大いに喜び、住職に「目出度く源氏が再興した時には必ず住職の恩に報いるであろう。何か希望はあれば遠慮せずに申せ。」と言い、住職は「弓を引いてその矢が届いただけの土地を頂き、いつまでもこの竹藪のある堂をお守りし、土地の人達のお役に立つようにできれば何よりと思います」と話したという。頼朝はこの竹を旗竿としたという。

満能院では、毎年２本の竹を鎌倉将軍家に献上したと伝えられている。満能院は、明治になって廃寺となっている。

冨浦における頼朝伝説

頼朝伝説が残る富浦の里山には御越坂がある。頼朝が勝山から館山に向ける途中、冨浦の丹生から福澤（金谷谷村の磯草）の大きな坂を越えて行ったと言われている。偉い武将がお越しになった坂して、村人たちがつけた名が「御越坂」だそうです。

君津市の頼朝伝説

八重原の塞神社の頼朝伝説

頼朝が北上の途上、この神社で武運長久を祈り、記念として松を植樹し、平家を滅ぼし幕府を開いた

後に「道祖神」と書いた額を奉納したという伝承が残っている。

その他に富津市では、愛宕山の観音堂、吾妻神社、君津市では久留里神社、八雲神社、人見神社などでは武運長久を祈願したり、弊帛や刀を奉納したという伝説がある。

塞神社入口の鳥居と参道

君津地方にはその地名に「五十騎坂・百騎坂・百坂（ももさか）・数馬・神妻・三百坂・三百騎坂・千騎坂などの地名がある。それぞれの場所は、頼朝らが通ったか、或いはよりとものもとへ房総各地から馳せ参ずる武士団の通ったルートではないかと考えられる。頼朝が実際に通過した道筋は確定出来ないが、こうしたルートに添って、様々な頼朝伝説が残ることになったと推察できる。「百」「三百」「千」「万」といった数字から、北上するにつれて増えてゆく兵士の数と思うが、清和地区の「三百騎坂」という地名の「三百」は頼朝軍の兵士の数ではなかったのではないかと思われる。それは、頼朝が愛宕山を下って突き当たった難所を、近隣の農民に応援を頼み、山刈りや道を造ってもらつた。その時に来てくれた農民の数とか、かり出された馬の数が３００頭ではないかという説もある。

房総各地に残る樹木の伝説

逆さ柿の伝説　（富山町）

路傍にあり、頼朝が石橋山の戦いに敗れ逃れて来た時、柿木の枝を逆さに地に植え、「我が志ならばこの枝　必ず生きんと行って祝いしたもの」と言い、枝はことごとく下向きになっているという。

逆さ梅の伝説　（鴨川市）

広場の飛梅山福生院の境内に、その枝がことごとく下を向いている照水梅という古木がある。これは頼朝がここに赴く途中、梅の枝を折って杖とし、将来を賭して地に挿したものが成長したという。

二股竹の伝説　（富山町）（前ページでも紹介済み）

高崎不入斗の竹林山萬能寺の庭内の竹は必ず対生して、竹節の中間斉生も肥瘠も同じだという。

村人　はこの竹筒の生ずるのは豊穣の兆しとしている。この簇竹は二股竹または旗竿簇の名があり、源頼朝がこの藪の竹を伐って旗竿に用いてから、このように言うようになったという。

弓掛け松　（長南町）

頼朝がこの松の下で休んだ時、弓を掛けたという伝説。

母衣掛けの松　（君津市水室山）

治承年間に頼朝がここに登って、母衣を脱いでこの松の枝に掛け、「我が軍利あらば永く翠色を保て、

然らずんば直ちに枯れ死せよ」と言った。それ以来、繁茂して数百年を経たが、慶應年間に落雷の為折れ、政権武門が離れると共に枯れ死したという伝説。

再栗の木　（市原市戸田）

年に二回実が結ぶ栗の木がある。その昔、頼朝が房州よりこの地を寄り昼食をした際、栗の枝を箸にした。それを地に挿して「我が世に出でし時は、又成れ」と言ったのが、せいちょうしてこの木になったという伝説。

二股薄　（一宮町東浪見）

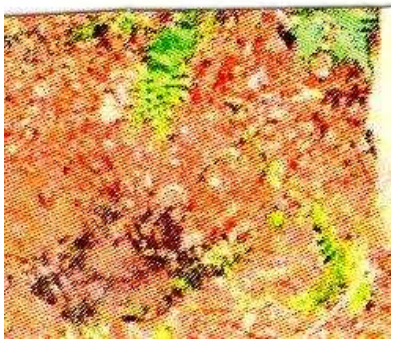
釣ケ埼にあり、茎が必ず二股に岐れている。頼朝がこの辺に休んで昼食の箸を地に挿して「思う事が叶うならば、根を生じてのち繁茂せよ」と言ったのに始まるという伝説。

逆さイチョウの伝説　（市原市八幡）

市原市八幡に鎮座する「飯岡八幡神社」を訪れ、戦勝祈願をした際に、イチョウの樹を逆さに挿して「もし活着すれば、大願は成就されよう」と祈願した。これが社殿東側の「逆さイチョウ」です。

※　これらの伝説は、将来の成功、出世を占うという「誓約」的な意味を持って植えられた樹木であると言えますが、枝が逆さに生えるや二股になるなどの特徴持った植物は通常弘法大師のような霊力の高い高僧に結び付けられることが多い。頼朝の安房・上総国巡りにおいては、これらの伝説はそれが各地に見られる特異な植物の由来として「誓約の成就」という形で発視している。

山田の楊枝（ようじ）井戸の伝説



安房には頼朝伝説にまつわる井戸がたくさんあります。一番有名なのは平群（へぐり）郡山田の「楊枝井戸」です。治承４年９月３日に、頼朝は上総介広常の館を訪ねるため、竜島の宿を出発し、池月、大崩を過ぎて、嶺岡の山中に歩みを進めました。けれどもその山道は険しく、まるで獣道のようでしたから、頼朝一行は疲労と喉が渇き、動作が大変鈍くなってしまった。水を求めて頼朝一行は嶺岡の南面を少し下ると小さな谷川を見つけましたが、そこには水は無かった。馬から降りた頼朝が神に祈りつつ手にした楊枝を池に挿すとそこから清水が湧き出し、頼朝一行は大喜びで、人馬も渇きを癒したという。「楊枝の井戸」は今も平群川の源流として湧き出している。

「日本伝説業書　安房の巻」によれば、長狭郡（鴨川）の貝渚で上総広常との合流をあきらめた頼朝はそのまま北上せず西側に戻り大山不動尊に参詣し、竹岡・富津・木更津などの海岸線よりを北上していった。なぜ北上しなかったのかは定かではないが、一説によると上総介広常は「頼朝を隙があれば殺害してしまおう」という二心察して西側に戻り上総国を目指したという。

１３日、３百余騎に達し、安房国鴨川の安西館から上総に向け出発する。岩井、平群、千代、本織、松田、和田浦、東条にて広常を待つ。上総広常はまだ至らざるにより、西進して大山から立花峠を越えて上総の西岸を北進造海、佐貫、磯根ケ埼、篠部、江川川尻を過ぎ千葉常胤がもとに至らんとした。途中の江月、君津・富津、木更津、袖ケ浦、市原等にも頼朝にちなむ伝説が多く伝えられる。

名馬・池月の伝説

名馬、池月と馬賀氏江月鶴ヶ峰山神宮に隣接して馬賀を名乗る旧家がある。乗馬江月を献上したので、頼朝がその徳を讃え「馬賀」の姓を賜ったという。江月は池月をなまったもので馬の住んでいた場所を馬ノ住（小字）と称している。今も馬ノ住に近い武右衛門方に頼朝の馬つなぎ石がある。

二十貫位の丸石である。

池月のヒズメ跡の石と伝えられるものが、勝山小学校にもある。大きさはおおよそ１００×８０×５０ｃｍくらいで、中央に径１０ｃｍくらいの穴がある。元この地（中太房）の田んぼの中にあったが、耕作のジャマだと取り除けると持ち主が病気になると言われ、そのまま手に触れるものもなく残されていた。大正の初め勝山小学校の敷地として田が買収されたので、今は校舎中央び築山の「明治が丘」に移されている。おそらく古社寺の礎石と思われる。

他に、市井原字井戸の上、明石源治家の庭先、井戸の付近のも「頼朝公乗馬のひづめ跡」と称するものがある。

みやまの椎は実がならない

字みやま、八田地先には頼朝の宿られた洞穴というものがある。これを過ぎ、瀬高―保田見―梨沢に通ずる道を「みやま」という。この道を馬に乗って通過中、椎の実が頭に当たったので、頼朝は怒って「花が咲いても実はなるな」と言われ、以来「みやまの椎は実がならない」と。

瀬高には早川を名乗る一族があるが、与兵衛家の祖は善左衛門為則と称し、石橋山の合戦に公に従い、後逃れてこの地に住し、農に帰したと言われる。

榎本家の二つ紋

大六の名主は榎本と言い、代々秀輔と称する。頼朝上陸の時、和田義盛繚あって同家の娘をめとる。よって榎本家は依頼、和田氏の紋と自家の紋とを組み合わせて使ったという。あるいは後の和田氏房総の所領や朝夷三郎伝説とも関連があるか。土地の人は同家を御代官と称して栄えたが、大正に至って後継が絶えた。

日本寺の大蘇鉄とかがみ岩

頼朝は本名村に立ち寄って村名を問い、里人本名村と答えるを聞き、大いに喜び「我が本名を挙げんざしならん」と。日本寺本堂前の大蘇鉄は頼朝公の手植えという。また明鐘岬には「かかみ岩」がある。頼朝が雨露を避けられし跡と言う。今、地形変じて定かではない。胃島、蔵掛け石など皆、頼朝にちなむ。

高宕山の鐵釜

頼朝が安房から北上した時武運長久を祈願したという岩屋があり、源家の再興がなり鎌倉に幕府を開いた後に黄金の観音像を奉納したとも伝えられる。この山の山頂に大きな鐵釜がある。この大釜は頼朝が飯を炊かせた釜だと言い、常に釜の中には水がたたえられ、稲作に関連した民俗のあった事を伝えている。周辺の里では日照りが続き稲作が困難になると、里の代表がこの釜の水をもらいに竹筒

を持って登り、休まず里に帰り、水田に注ぐと慈雨を降らせることができ、途中で休むと無駄な雨が降ってしまうという伝説がある。

木更津市での頼朝伝説

海中山善光寺（鶴島山）

頼朝が安房に敗走する際に浦賀水道で梵鐘の音がしたので先祖や一族の冥福を祈った。その後頼朝は千葉氏を頼って北上する際に善光寺の鐘あったと知り参詣し、この寺を「海中山」と名付けたという。

頼朝が聞いたという伝説の梵鐘は、戦後に再興されたものです。

八剣神社には、頼朝が武運長久の願いをしており、その際に蘇鉄を手植えしている。また、請西には古椀（こわん）という地名がある。頼朝が普子上の途中この地の里人から古い朱塗りの椀に盛った麦飯を進められ、このことから里人たちにこの地名を与えたという。

同じ地名伝説として太田山の北方に「長須賀」という土地があり、そこに畳が池と呼ぶ耕地の水源にもなった古い池があり、これは里人たちが頼朝一行を歓迎するために池のまわりに畳を敷いて食事を振舞った事に由来する。更にこの池には葭（よし）が繁茂しない。頼朝が食事の時に葭を折って箸にした処、唇を切ってしまった為、怒った頼朝は池の中に葭を捨てたという。以来、畳が池では葭が生えなくなったという。

横須賀にある「小籠」の姓は、頼朝がここで休息をした時、里人が小さな籠を編んで飯を盛り、弁当として提供した処、頼朝は大いに喜び、それにちなんだ姓の「小籠」を与えたという。

木更津周辺にある「草刈」「苅込」の姓は、頼朝が来た時、道の草を刈り込んだ事にちなむという。

君津市大井から木更津市矢那に抜ける坂道は「千騎坂」と呼ばれ、頼朝の軍勢に関わる地名です。

草敷の勇後の松跡

この地で頼朝は、大きな松の木に馬をつなぎ、休憩を取った。土地の人が大勢出て草を刈り、敷いて座らせたことから、ここを「草敷」と呼ぶようになったという。後に馬を繋いだ松は「勇後の松」と呼ばれるようになった。この松は嘉永年間に枯死でしまった。現在は株跡に由緒を記した碑が建てられている。

畑沢の浅間神社の観世音菩薩

頼朝が北上して下総に向かう途中、木更津市畑沢にある浅間神社に武運長久を祈願したと伝えられるが、その後平家を破り鎌倉に幕府を開いた際に、お礼の意味で建久９年（１１９８年）に観世音観音像の仏像を浅間神社に寄進したものという。

また、畑沢という地名も頼朝がらみという。それは、この地の農漁民たちが頼朝を歓迎し、畑沢川畔の竹林で竿をつくり、一旗たててこれを援助したということから、この地名が生まれたという。現に畑沢地区を東西に流れる畑沢川中流の小字「袋下」という所に竹林が茂り、榎の巨木のぞばに八幡神社の祠があって、これが竹林の跡と言われる。

この八幡神社を「白旗八幡」と言い、頼朝は竹を切った刀を浅間神社に奉納し、この地に旗竿という

地名を与え、源氏の守護神を祭ったという。「袋下」という地名は、頼朝がここで具足を整えたことから名づけられたという。

袖ケ浦における頼朝伝説

飽富神社の頼朝伝説

飽富神社には、源頼朝が戦勝祈願をしたと言う伝承があり、禰宜の案内で市原郡立野村の長右ェ衛門宅を紹介をしている。

畳ケ池の伝承

千騎坂を駆け抜けたり草敷でマッタリしたり、騒いだりして各地で大騒ぎしながら袖ケ浦の辺りに到着、沼を中心とした湿地帯に足を踏み入れた。現在の畳ケ池には２通りの伝承があるようで、騎馬の足元を確保させるためにとも、休憩を取らせるためとも言われている。ともあれ「頼朝軍の為に湿地に畳を敷いた」という伝承は共通している。

万騎坂

万騎坂は頼朝軍が一万騎ほどでこの坂を越えたというわれ、袖ケ浦市の北東部で、坂の特定は出来ていないが須軽田坂ではないかと思われます。栢橋方面から川原井を通り、鎌倉街道の合流する道で、それが万騎坂です。

御所覧塚

「街道上くびれた様な須軽田坂を上ると、６万坪、御領という広大な平地にでたところが「御所覧塚」です。
細い標識には「御所覧塚は、治承４年（１１８０年）に源頼朝が、平家打倒の為上総国を通過した際にこの塚を築かせ、塚上で武士達を閲兵したとの言い伝えがあります」と書かれている。

切替家の伝承

頼朝は、立野の豪農の長右エ衛門宅に宿泊した際に、上総の状況を察知し、裏山に洲崎明神の分霊を祀り　「安房州神社」と号して、剱を奉納している。その後、長右ェ衛門宅を発つ時に同家の竹林より竹を切らせ　旗竿を取り換えを命じたことで、後に「切替」の姓を賜っている。他の伝承では、頼朝が滞在中に長右ェ衛門に「切替宅から半日に回れた地域を与える」と言われ、辻々に目印をつけてきた範囲を所有地として賜ったという伝承もある。

豊成の不動院に残る伝承

立野の長右ェ衛門家に向かう途中に、豊成の不動院があり、そこに立ち寄り不動明王に武運長久を祈願したという伝承がある。

姉埼神社と流鏑馬

頼朝は、姉埼神社に参詣し神前に軍卒を整え、武運長久を祈願した。それ以後、姉埼神社では流鏑馬の神事を行うようになったという。姉埼神社には、日本武尊が東征の際に参拝し武運長久を祈願しており、頼朝もあやかったとも言われる。

島穴神社の頼朝伝説

現在の島穴神社は、古代の「島穴神社」の系譜を引くものという。島穴神社の祭神は志那津比古尊（しなつひこのみこと）で、日本武尊が東征の際に暴風に遭った際に、暴風の神である志那津比古尊に武運長久を祈ったと言われ。源頼朝もそれにあやかり参詣し庇護もしている。

五井大宮神社の頼朝伝説

五位大宮神社には、日本武尊が東征の際に武運長久を祀ったという伝承がある。頼朝も上総国を通った際に当神社に立ち寄り戦勝祈願の幣帛を奉納している。建久年間以降、頼朝は家人に命じてしばしば報賛をしている。

君塚の白幡神社の伝承

頼朝が、武の郷の塚で休憩に際に、千葉介常胤が騎馬２００騎を引き連れ出迎えに馳せ参じたので、頼朝は大変喜びこの地を「喜見塚」と呼び、この地に日本武尊を祀る「武の塚神社」があったので、頼朝は戦勝祈願をし「源氏の旗印の白旗」を奉納し、それ以後「白幡大明神」と呼ぶようになった。

武の郷は、現在の君塚です。

飯岡八幡宮の逆さイチョウ

上総の国府惣社と言われる本神社に、ここに頼朝が参拝し、ここにイチョウの樹を逆さに植えて「もし活着すれば、大願は成就されよう」と祈願をした。これが社殿東側の「逆さイチョウ」です。

若宮八幡神社（菊間）

菊間にある若宮八幡神社は、白鳳２年（６６２年）に大鹿国直により鎮座された。相殿の大鷦鷯命は治承４年（１１８０年）に源頼朝の祈願ににより鎌倉から当神社に合祀し、若宮八幡と呼ぶようになった。また、頼朝より神田数十歩が寄贈されている。

その他の市原市内における頼朝伝説

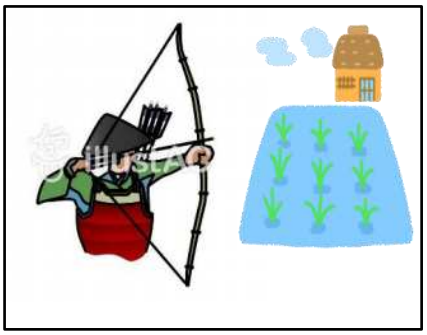
前記以外にも市内には頼朝伝説があるので紹介します。

市原市戸面にある出世観音

頼朝は、千葉氏を頼って上総国に入り、戸面にある立国寺に立ち寄り、戦勝祈願をした。その際に、安置されている御神霊を「再起の守護神」「世観音」と命名している。

矢田村

矢田村の地名の由来は､頼朝が再挙をはかりこの地を訪れた際に、戦勝祈願の為に弓矢を放った処、その矢が田の中に立ったことから、この地を「矢田」としたという。



真ヶ谷の聖徳太子堂寺

牛久の隣部落にある「真ヶ谷」という地区にある「聖徳太子堂寺」があります。そこには「行基」の彫った太子像が安置されており、頼朝が当寺を参詣した際、太子像があるのに気づき深く感銘を受け、弘法大師作の仏具を寄進したと言われる。

太子像の伝承では、天平２年に伊豆箱根両権現に行基が参詣した際天下泰平国家安泰を願っていると、太子の霊が現れて行基に「自分の尊像を彫れば末永く国を守ろう」との言葉を賜ったことから、行基は３体の太子像を彫り、一つを箱根山麓に安置した。後に源頼朝の師であった開性房阿闍梨が尊像を拝していたが、頼朝の夢にこの象が現れ仏力を添えようと告げた。その後平家追討の印令を受けた。源平の争乱により乱れた国に安置することを危惧した玄海阿闍梨により尊像はこの地に運ばれ安置され「聖徳山宝珠院太子堂寺」と号した。

石橋山の戦いに敗れて敗走してきた頼朝が、当寺を参詣した際に尊像がここにあることに深く感銘し、仏具を寄進したという。

風戸の地名の由来

伝承によると、この地の寺院日光寺に頼朝が参詣した際に、それまで強風が吹いていたが、戸を立てたように静かになったことから「風戸」の地名が付いたと言われる。

日光寺には、千葉県指定文化財の「木造観世音観音像」が所蔵。

佐是八幡神社の鷹の森の由来

佐是に鎮守する八幡神社の伝承では、源頼朝が友田丹下尉広次の屋敷に宿泊し、八幡神社に参拝した際、鷲の森と呼ばれた社叢から鷹が舞い降りてきて、頼朝の弓に止まったという。

そこでこの森を「鷹の森」と呼ぶようになったという。

神社の神事に「風神祭」がある。

廿五里の地名の由来

昔、当地の東泉寺にあった刺繍の仏像が霊異を起こし、これを崇敬した源頼朝が毎月焼香の使いをよこした。

その距離が、鎌倉から２５里であったので「廿五里（ついへいじ）とついたという説と、他に、津以比地や露乾地と書いたとも言われています。

千葉市内における頼朝伝説

千葉市内には源頼朝にまつわる伝説がいくつかありますが、史実かどうかは不明です。ここではわかる範囲での紹介をします。

君待ち橋の３つの伝承

１－９９５年（長徳元年）に藤原実方（さねかた）が陸奥の国へ下る途中にこの橋を越えたので、実方が「寒川（さむかわ）や　袖師ケ浦に立つ煙　君を待つ橋身にぞしらるる」と読み、君待ち橋と名付けられた。

２－１１８０年（治承４年）に、千葉常胤の一族が源頼朝をこの橋のたもとで出迎えた時、頼朝がこの橋の名前を尋ね、常胤の六男胤頼が「見え隠れ八重の潮路を待つ橋や　渡りも会えず帰る舟人」と詠んだので君待ち橋と呼ばれるようになった。

３－昔、橋の近くにすむ少女と川の対岸に住む若者が恋を語り合っていた。ある日大雨で橋が流された為、泳いで対岸に渡ろうしたが濁流に流されこの若者は亡くなってしまった。それを見た少女

は悲しみのあまり濁流に身を投げて自殺した。いつしか村人は、この橋を君待ち橋と呼ぶようになったという。

白旗神社（千葉市中央区新宿）

神社の社伝によると、１１８０年（治承４年）に源頼朝が千葉常胤に参上を求めた時、稲荷の境内に源氏の白旗を立てて奉納した。これ以降、「白旗大明神」と称し、明治時代に「白旗神社」と社号を改めたという。但し現在の「白幡神社」であり、千葉常胤が頼朝と面会した場所については諸説あり、「市原君塚説」や市川の「下総国府説」があります。しかし、「君待ち橋」伝説のように常胤の六男胤頼がこの地で頼朝に合い、白旗を神社に奉納したという可能性はあると思われる。

稲毛浅間神社　（千葉市稲毛区稲毛）

神社の社伝によると、１１８０年（治承４年）、源頼朝が千葉常胤の六男胤頼を使者として御幣物を捧げ、武運長久を祈願したと記されている。そして１１８７年（文治３年）に常胤が社殿を再建したと言われる。

千葉神社　（千葉市中央区院内）

神社の社伝によると、１１２６年（大治元年）、亥鼻城に拠点を移した千葉常重が、一族で信仰する北辰妙見尊星王を祭る妙見社（現千葉神社）を創建し、妙見信仰の本宮とした。１１８０年に石橋山の戦いに敗れて安房国に逃れて来た源頼朝は千葉常胤らを味方につけましたが、千葉に寄った頼朝は妙見社に参詣し、自筆の願い文や大刀、武具などを奉納したと言われる。その後、平清盛などの平氏を滅ぼした頼朝が鎌倉幕府を創設した。

幕張の地名の由来

治承４年（１１８０年）に源頼朝が、安房国より北上し千葉氏の協力を得て進軍する際にこの地にて馬を乗り換えた（馬を加えた）ので「馬加（まくわり）」となった説と、千葉神社を含めた周辺神社の磯出式の際に、祭馬が多く集まったことに由来説があり、その後幕張に転訛したと思われる。

市川市における頼朝伝説

下総国府跡

９月１７日に頼朝軍は３００騎を率いて参陣してきた千葉常胤たちと共に着いた。そこに上総介広常が２万の兵を連れて参上した。広常は、房総平家の総領家の頭目であり、東国最大の勢力であった。広常は千葉常胤が頼朝のもとに参じたことを聞き、やっと動き始めた。領内の平家方の目代を倒し、配下の武将の内、平家に同調する者を粛清するなどして、頼朝の軍勢の後を追い、隅田川べりにて頼朝と従った。しかし、頼朝はそれを喜ぶのではなく、逆に広常の遅参をとがめたという。そのことを配下の者から聞いた広常は「さすが、頼朝殿は大将の器よのう」と言って目を細めたという。しかしその認識は甘く、広常が動いたのは常胤が動いたからで、常胤の配下３００騎の兵が勇猛果敢に戦えば、広常もその気になり、広常配下の２万の兵もその気になる。用兵上、これで広常のウエイトは著しく低下した。しかも、当初のどっちつかずの態度に、頼朝は広常に「二心あり」と見て取り信頼を置けない人物と見抜いてしまったという。

笹屋うどんの頼朝伝説

行徳にある「笹屋うどん」には、頼朝にうどんを振舞いお礼に「笹りんどうの家門」頂いた伝承がある。それは伊豆から逃れて安房国に来て、千葉常胤や上総介広常らの援軍を得て北上し、浦安まで来た時にはお金も食べ物も既に尽きていたということで、「困ったな」と頼朝は思った。すると行徳にいたうどん屋の二兵衛なる人物が、早速、うどんと酒肴をつくって頼朝一行に振舞ったという。そこで頼朝は「ありがたい、これで生き返った。お礼と言っては何だが」と言って、お礼に笹りんどうの紋を与えたと言われています。これがきっかけで、うどん屋二兵衛は家名を「笹屋」と改めたという。

九十九里浜と頼朝伝説

九十九里浜はその昔、玉の浦と呼ばれていたという。それは昔から紀州和歌山と房州は黒潮でつながっており、地名も勝浦や白浜など同じ地名が多い。それでは玉の浦が九十九里浜と替えられたのはそこに源頼朝や義家が登場するという。非常に古い話なので、この伝説自体が史実かどうかは不明。その一説によると、治承４年（１１８０年）に石橋山戦いで敗れ、安房国に逃れて来た際に太東岬から北方に延びていく長くて美しい弓なりの浜を見渡し、「何と長い浜であろうか、いったいどこまで続いているのだ」と聞いた。そして、この長い浜の行く先を極めたいと思ったという。また、そこまでの距離を知ることは軍略上も必要と思った。さらに、浜に矢を刺すことでそこが神域であることを示すことにもなり、それは悪霊を追い払うことでもあった。

翌朝、頼朝は夜明けとともに一行を討ちつれて浜に立ち、一里ごとに矢を一本ずつ指して、一行は刑部浦へと進んだ。使った矢は９９本だったので「九十九里浜」と名付けたという。しかしこの浜の長さは６６ｋｍで、１７本の矢があれば済むのですが、昔の人は「長い」という意味を持たせたのではないかと思う。

他の市町村での頼朝伝説

いすみ市の伝説

引取り橋

岬町中根に「弓取り橋」と呼ばれる橋がある。この橋の名は「源頼朝伝説」に由来する。平安時代末期の頃は平清盛の平家の一族が政治を行っていた。そのような平家の横暴な態度に源頼朝の源氏一族で、治承４年（１１８０年）に頼朝は伊豆で北条一族の応援を得て挙兵した。しかし、石橋山の戦いで敗れ安房国に逃れてきた。頼朝は援軍を上総介広常と千葉常胤に応援を頼むために使者を出したが、千葉常胤からは援軍の返事があったが、上総介広常からは返事がなく、やむなく上総の国に向い進軍した。その際に夷隅郡の中根の近くに来た時、川は昨夜の雨で増水をしており、川の流れを見ながら慎重に進ませた。北条義時が川を渡る際に、渡り切る時に馬の背に結んでおいた弓が川に落ちてしまった。それ気が着いた頼朝が流れる弓を追いかけて馬で川に飛び込み、流れる弓を自分の弓できっかけて拾い上げた。それを見ていた家来たちは、さすが源氏の頭領　頼朝殿と歓声が上がったという。そこでその後にこの橋の名を「弓取橋」と名付けたという。

一藁（いちわら）の姓（かばね）の伝承

岬町に「一藁」という姓がある。この姓の由来は、石橋山の戦いに敗れ安房国に逃れて来た頼朝達が二十人足らずで、傷つき、血と泥に汚れた哀れな武士の一軍です。敗戦の疲れと逃亡の疲れで足取りもゆっくりでした。この一軍に誰しも関わりたくないので嫌っていると、一人の若者が一束の藁を差出し、「これでわらじの紐でも作って下さい」と言って渡した。そこで頼朝は「かたじけない。お礼に何かをしたいが」と言うと、若者は「お礼はいらない。畑に行けば食べ物はあるし、金が溜まれば泥棒に合う。それならば姓（かばね）が欲しい」というと、「それならばたやすいこと。一藁の姓を与えよう」と申し、授けたと言う。今でも岬町には「一藁」という姓が 15 軒残っています。

四つ石の伝説

勝浦市と大多喜町の境に「四つ石」という地名がある。その言い伝えは、頼朝が石橋山の戦いで敗れ安房国に逃れてきて上総介広常に合うために佐野の集落に差し掛かり夷隅川に馬を進めた時に、平家の追っ手が近づいてきたのですが、多勢に無勢でここで戦えば負けは明らか、頼朝は「南無八幡大菩薩、我らを助けたまえ」と叫び、馬を躍らせ夷隅川に飛び込んだ。すると不思議なことに、四つの大きな石を足場として向こう岸に渡ることが出来たという。そして頼朝一行が渡り切ると大きな石は川深く沈み、追っ手はただ見送るばかりだったという。

また、この近くには「槍折坂」という地名もある。これは頼朝がこの時持っていた槍を折ってしまったことからこの地名が付いたという。

註　水を差すようですが、源頼朝が大多喜やいすみに来たという史実はありません。頼朝の命を受けて上総介広常に援軍を依頼に来た使者は、和田義盛一行と言われています。

編集に必要な資料をインターネットより抽出し、参考に作成しています。

現代語訳　吾妻鏡　　吉川弘文館出版
房総の頼朝伝説　　笹生　浩樹　著作
千葉の道　千年物語　山本　光正　千葉日報社
鎌倉遺構探索
ウィキペディア　源頼朝
源頼朝の伝説（鋸南町史）昭和４４年刊より
神話伝説ふしぎ草紙
南房総市　広報紙
機道地方の歴史
鎌倉暮らし Diary
房総の史実

上総の国いちはらの歴史を知る会

（ふるさと市原をつなぐ連絡会会員）

住所　市原市能満１０２０番地１

TEL　０９０－３５４５－１１１３

E―mail bousaiya0119@yahoo.co.jp